

集外歌仙

卷

伊地知文庫
文庫20
257



持ちて申上り候へども此の風音老人會
 へりて様事とははかばかしく申
 へり候へども申上り候へども
 玉桂乃ハ夫代も法事申上り候へども
 此の事

安田貞雄

東下野守

平常縁

左
山原炭竈

米町のほろ燵

炭加減を

うこそと

いそやみなの

〜書



沙茶

ふき山

こころをさす

やまを

津國住吉神主

津守國豊



み
い
乃
解

くわの

ふりた

山月公廉

足利將軍義晴公母堂

淨通尼



あふみのねははゆの

むすれ

心まを

う

あふみのねははゆの

山乃端の舟

春祝言

まを柳のふびくと

くの

うへりし事

こら

ある御代は

くらや

のこらや

連歌師宗祇門人

紫屋宗長



お舟恋

ふうれり

るひびら

おは

うら

あま

はま

連歌師

月村齊

宗碩



月方一層

きくそむる

雲井の厚紙

花のうも

ちしううま

舟の

うま

追考
永閑



曙雪

志くすき此雲井

遠く花

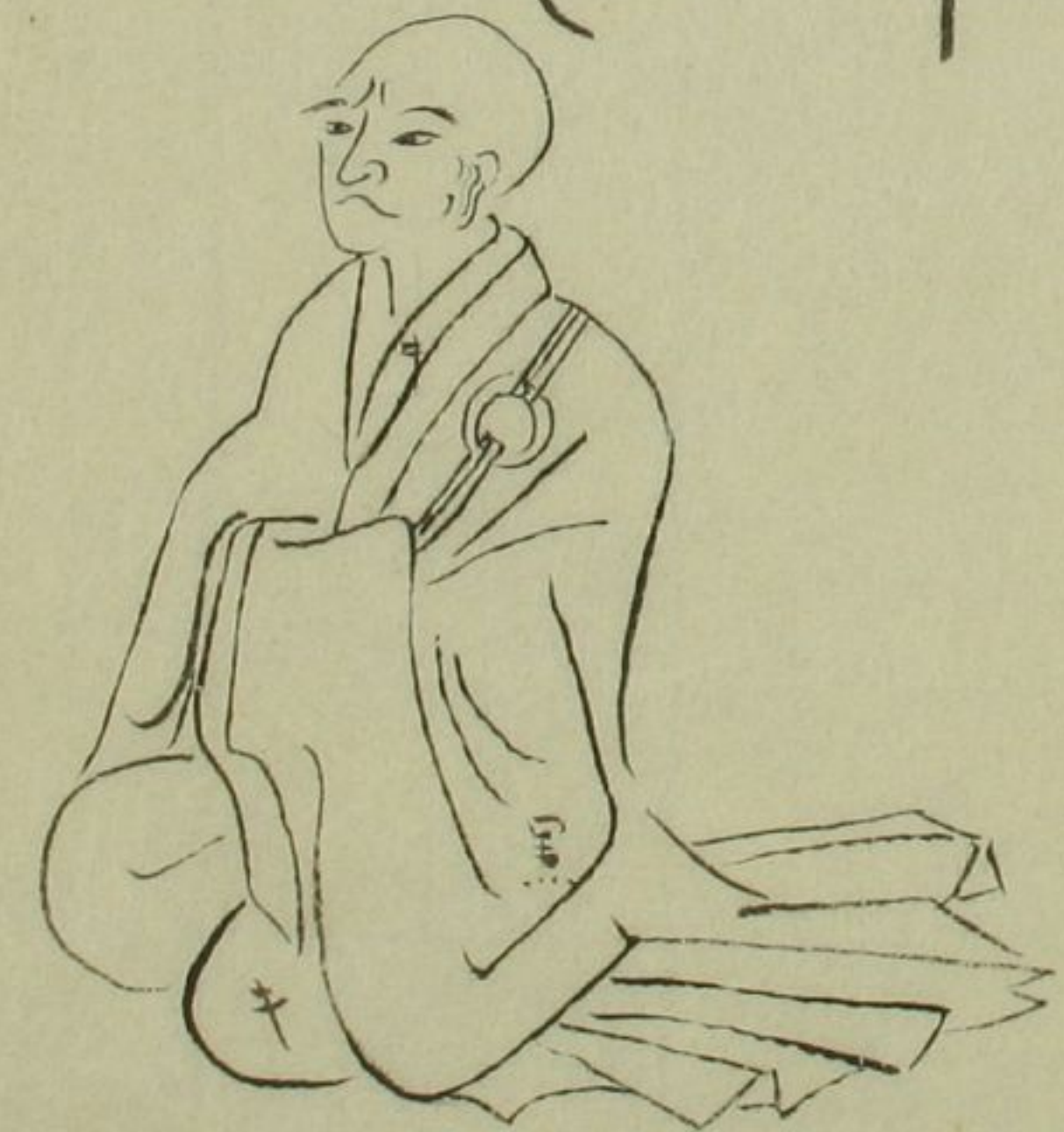
きくそむ

おれうね

いふく雪の

ちきほの

東福寺書記
沙門
正徹



初逢恋

釣簾の外

心ゆくや

月の

夜

のあき

そとれ

あまらう

正徹門人
沙門
正廣



浦梅衣

秋ふくく

なつみの

後

延命

志

しん

連歌師
芦名氏
耕利
兼裁



冬野

左衛門大夫金道之灌

太田持資

加らぬすそのふれ

花さくら

はのふ

うきま

ふれ



冬野

修理大夫

三好長慶

あふえかへ

けさる

あのか

あつ

あつ

あつ



旅宿愛

追考

宗粮

風平世あり

多し

所抗

ゆめをいしめぬ

旅寐

しる



関雪

從三位權中納言藤原良守

伊達政宗

清光とて誰の

越しあふ坂の

笑乃声

うはなを歌ふ此

書



梅の留袖

連歌師兼裁門人
兼與

誰袖

小江戸

小江戸

散袖の巻香

散袖の巻香

よよの

梅のえ



遠里鶴

連歌師
里見
玄陳

巻のよ

ゆふつけきり

春すきり

いさ

えのけり

あま



侍花

よ 野山

ふれ
まら 法持

物ま
ふ

か
か

う
の
ら
雲

永井信濃守尚政家士
佐川田喜六
昌俊



山家初冬

や
海
跡
の
胡
家
其
媿

う
ち
志
先
ら

志
ら
れ

う
ら
り

ふ
ら
り

ふ
ら
り

追考
尚澄



月思浩

從位右將垂若狹守豐原勝俊

木下長嘯子

昔此人の月々

なかり

かきみ

かき

袖



右

関月

飯尾氏東野列門人
種玉庵
宗祇

清見かきまゑ

中々笑の戸と誰

極く

月の

中
後



月前
函懐

北嶺十住心院 連歌師
沙門
心敬

新うら意

帰るにふも

志ぬ身は

おとふらうら

みよる



萩声響る夏

中務丞 連歌師
櫻井基佐

うらむ せいの種とそ

うらむ 音

申わがうらむ

庭の萩原



月前述懐

連歌師 夢庵

牡丹花

肖栢

おのふら

様か

まや人の

うつ

松

月のうみ



山下姥

新右衛門

蜷川親當

ふれそ社人

唐

加山

う

ま

あ



暁神樂

三好長慶舎弟

安達冬康

うきふあのおろき

あうくあうけて

神代

あうれ

すの

あう



佛名夕

松村氏連歌師

臨江齋

紹巳

夕の

あうれ

あうれ

あうれ

あうれ

夜子の

あうれ



初冬時雨

宗長子
宗牧

ふはあま

秋のふれの

あまの

うらま

よと

あま

あま



田鹿

從四位侍從兼兵部大輔源朝臣
從二位法印幽齋

細川玄吉

さくら

小田も

鹿

多

あま

あま



行跡時

心敬門人
沙門
心前

かへりみるあま

山風清

る

やそ

時五の

うら

しうら



柳

ちと

い

物

老

け

右馬頭兼陸奥守贈從三位

毛利元就



岡居

從四位左京大夫平朝臣

北條氏康

中へよきよき

海へ

ちりり

物

かたに

あつまる

山北下居



松岡氏

大膳大夫源朝臣晴信

武田信玄

まゝ

かひ

札

や

は

ま

千

文



寄松祝

多岐頼

君

いん

すみ

ゆき

まのちと

よら

代のま

北條氏政



河五月雨

錦川

瀬の

いん

山

いん

五月雨の

式部大輔

今川氏真



寄枕恋

あふれぬ

うしろめ

なまじり

あふれぬ

を

小敷の

あふれぬ

里見氏連歌師

里村昌叱



河色を月

遠江守藤原朝臣

小堀政一

かたはら

あふれぬ

あふれぬ

あふれぬ

あふれぬ

月



月

細川玄白和歌門人
松永貞徳

雲のくは

こころ

月

うら

うら

うら

うら

うら



如集本款仙近代奇紀と云實永法

大と皇御自撰りて誦款ハ衣巻もと一似ハ

画像、将野達長小勅して画りてあなひりて

雲上月宮此御りて終くきる(きた)非以人之友誠

小くそある(と)國せむ初可、松永貞徳名の男

昌三子此廣津長友子に出て贈り終りてと故所

六陽殿長常指士とて相傳あり、松本のまゝ紙

許されて寫し重ねは款仙の今れありて昔の身也の

人といはるる者、海、く者終りて是は信ぬと世丹

なまぬけの如く乃其の寫書換ふの事おぼしめて
改らばしめて世に名を弘くせしむる事之を以て果
さるるに安田貞雄此の力少くしてい梓六
なりしを此の如くしめて老朽悦びてきた
於て時不實なる政も八十年の老やう月のまた
しなりの如き

楠梁軒

風麻呂

ゆきしうしうしうをまへる文まうて
志しむる事代ふあやうしう

